

# 平安時代の四国遍路

寺内 浩

## はじめに

現代において四国遍路といえは八十八ヶ所の札所寺院を巡ることを意味するが、周知の通り、そうした四国遍路が成立するのは近世初期になってからのことである。しかし、それ以前においても修行のため僧侶などが四国の周辺部を巡り歩くことは盛んに行われていた。むしろ、そうした四国を巡り歩く修行形態の延長線上に八十八ヶ所寺院が成立したというべきであろう。僧侶たちによるこうした修行がいつごろから行われるようになったかを確定することは困難だが、少なくとも平安時代末期には四国の海岸を巡る修行形態は存在していた。次の三つの史料はそのことを示すものである。

(ア)『今昔物語集』三二―一四

今は昔、仏の道を行ける僧三人伴なひて、四国の辺地と云は伊予、讃岐、阿波、土佐の海辺の廻なり。其の僧共□を廻けるに、思ひ懸けず山に踏み入にけり。深き山に迷にければ、浜辺に出む事を願ひけり。(後略)

(イ)『梁塵秘抄』

われらが修行せし様は 忍辱袈裟をば肩に掛け また笈を負ひ 衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地をぞ常に踏む

(ウ)『南無阿弥陀仏作善集』

(前略) 生年十七歳の時、四国辺へちを修行す (後略)

古代の僧侶の修行といえは山林修行が有名だが、当時においては海岸を巡

り歩くこともまた修行の一つの形態であった。(ア)に「四国の辺地と云は伊予、讃岐、阿波、土佐の海辺の廻なり」、(イ)に「衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地をぞ常に踏む」とあるように、四国の海岸線を歩き、修行する僧侶が当時すでに数多くいたのである。(ウ)は東大寺再建に努めた重源(一一二二―一二〇六)の著作で、「十七歳の時」は一一三七年になる。この史料は原本が残っており、それには「辺」に「へち」と振り仮名が打たれている。従って、「四国辺へち」は四国の海岸部と同義と考えられるので、重源は一二世紀の前期に四国の「海辺の廻」を行っていたといえよう。

## 一、辺路修行の実態

海の彼方に根の国、常世の国を想定する海洋信仰は山岳信仰と並んで日本古来のものである。平安時代における「海辺の廻」という修行形態は、日本古来の海洋信仰に平安時代になって隆盛する浄土信仰とりわけ補陀落信仰が加わって生まれたものである。しかし、山林修行と異なり平安前期までは海岸部で修行をしていた様子を示す史料は少なく、室戸で修行したとする空海の『三教指帰』がある程度である。しかし、平安時代後期になると『為忠家後度百首』、『行尊大僧正集』、『新猿楽記』などに海岸部を巡り歩く修行者たちが見えるようになる。

ところで、五来重氏は辺路修行の実態について次のように述べておられる。

すなわち辺路修行というのは、海岸にこのような巖があれば、これに抱きつくようにして旋遶行道したもので、これが小行道である。これに對して東寺と西寺の間を廻ることは中行道になろう。そしてこのような海岸の巖や、海の見える山上の巖を行道しながら、四国全体を廻ることが大行道で、これが辺路修行の四国遍路であつたらうと私はかんがえている。(同『遊行と巡礼』)

五来氏によると、辺路修行は単に海辺を歩くだけでなく、各地の行場での修行を伴うものであつた。基本的には支持されるものだが、辺路修行の実態については『本朝法華驗記』や『今昔物語集』などの説話史料によつてもう少し具体化することができる。

こうした説話史料には平安時代後期の諸国を遍歴する修行僧が数多く取り上げられている。そうした説話を讀んで気づくことは、当時の修行僧は単に諸国を廻遊していたのではなく、諸々の靈驗所に詣で、そこで修行をしていたことである。

これらの史料から知られるのは、「諸の山を廻り海を渡り、国々に行き所々の靈驗に参て、行ひけり」(『今昔物語集』一三一―一)、 「国々に行て、所々の靈驗を礼まむ、と思て」(『同』一三一―一七)、「六十余国に至らぬ所無く行て、貴き靈驗の所々を礼ける間に」(『同』一五―二八)などとあるように、各地の靈驗所を巡り歩き、修行を行うことが当時の廻国修行の実態だつたことである。

そうすると、四国における辺路修行についても同様のことがいえるのではないだろうか。すなわち、海岸部の各地に靈驗所があり、そこで修行を行いつつ各靈驗所を巡り歩くのが「海辺の廻」の実態だつたのではないだろうか。もちろん、著名な靈驗所以外にも多くの行場があり、そこでも厳しい修行が行われていたであろう。平安時代の四国の辺路修行は単に海辺難路を歩くだけではなかつたのである。

## 二、四国と浄土信仰

平安時代後期になると海岸部を巡り歩く僧侶たちが史料上に多くみられるようになるのだが、彼らが修行の場としたのは決して四国だけではなく、日本各地の海岸で辺路修行はなされてきた。しかし、前掲史料(ア)(イ)(ウ)にみられるように、辺路修行は四国のそれが著名であり、辺路修行は四国で盛んに行われていた。では、それは何故なのであろうか。

四国と辺路修行の関係を考える際にまず最初に検討すべきはやはり補陀落信仰であろう。平安末期の辺路修行の背景には日本古来の海洋信仰に加えて補陀落信仰などの浄土信仰があつたのだが、この補陀落信仰において四国は特別の場所、すなわち熊野と並んで補陀落渡海の地だつたのである。

補陀落渡海とは南方海上にあると信じられていた観音浄土<sup>11</sup>補陀落に向かつて渡海することであり、一種の捨身往生であつた。補陀落渡海で最も有名なのは熊野である。熊野からの補陀落渡海がいつから始まつたかは不明だが、少なくとも平安時代末期には行われていたことは確実である。そして、補陀落渡海は四国の室戸、足摺からも行われていたのである。

(エ)『観音講式』

(前略) 一条院の御時、阿波国の賀登上人、深く彼山を欣ひて、頻りに夢想あり。長保二年八月十八日、土佐国室戸津より、弟子一人を相具して、遂に以て進発す。一葉の船、飛ぶが如く南に向ふ。(後略)

『観音講式』は貞慶(一一五五―一二二三)の著で、一条天皇の時に賀登上人が室戸から補陀落渡海したとしてゐる。鴨長明著の『菟心集』三一五にも讃岐三位の乳母夫が土佐国から補陀落渡海を行った話がみえるが、賀登上人の例にならつたところがあるので、おそらく渡海地は室戸であろう。

足摺については、時期は少し下るが、次の長門本『平家物語』にみえる補陀落渡海が有名である。

(オ) 長門本『平家物語』四

(前略) さては昔、理一と申僧ありき。有漏の身をもて、ふだらく山を拜んと誓ひて、一千日の行ほうを始めて、御弟子のりけんと申一人ばかり召具して、御船にめして、おしうかび給ふに、むかひ風烈しく吹きて、元のなぎさに吹返す。理一猶行法の功をはらざりけりて、又百日の行法をし給ひて、百日過ければ、聖人もとより人を具してはかなふまじとて、御船にたゞ一人めす。彼舟はうつほ船なり。白きぬのの帆をかけて、順風に任す。げにもおいて事をへだて、遙に遠ざかる。御弟子のりけんは、聖人に捨てられ奉りて、ふだらくせんををがむべからざる事をかなしむ。輪廻して生死をしまじきやらんと、はや御船のかくるゝほどなれば、名残をしくしたひ奉り、余りのたへがたさに倒れふし、足摺をしておめきかなしむ。足摺地をうがち、身をかくすばかりになりぬ。(後略) これは補陀落渡海をおこなった理一に取り残された弟子僧のりけんが地をうがつほど足摺りをして悲しんだというもので、足摺の地名由来譚である。この史料より足摺からも補陀落渡海が行われていたことが知られる。

このように四国は補陀落渡海の地であった。とすると、初期の辺路修行者たちは、補陀落浄土に渡ることを望みながら四国の辺路を巡っていたわけであるから、実際に渡海するかしないかは別として、辺路修行者が補陀落渡海のいわば本場である四国に数多く集まるのはごく自然なことではないだろうか。

次に、補陀落信仰と並んで当時盛んであったのは西方極楽浄土への往生を願う阿弥陀信仰であったことはいうまでもない。平安時代後期畿内や西方浄土への往生を願う人々の信仰を集めたのは四天王寺である。四天王寺の西門は「当極楽土東門中心」とされ、「諸人彼の西門にして弥陀の念仏を唱ふ。今に絶へずして、参らぬ人無し。」(『今昔物語集』一一二二)といわれていた。

難波の海に入水往生した者も多く、保延六年(一一四〇)に入水した西念

は有名である。また、鴨長明の『発心集』三一六には「或る女房天王寺に参り海に入る事」という説話が載せられている。

さて、当時の仏教説話集には極楽浄土への往生をとげた人々の話が多数収められているのだが、それらを読んで気づくことは、往生の地を求めてわざわざ四国に行く人々がしばしばみられることである。いくつかの事例を挙げてみよう。

(カ) 『今昔物語集』一五一—四

(前略) 観幸何なる縁にか有けむ、堅く道心発にければ、本寺を去て、忽に土佐国に行て、偏に名聞利養を棄て、聖人に成て年来行ひけるに、(中略) 弟子物の迫より臨きて見れば、仏の御前に端坐して行ひ居たり。良久く有に、戸を叩て呼ぶと云へども音も為ねば、戸を放ちて入て見るに、掌を合せて端坐して死てあり。弟子等此れを見て、泣々く悲び貴むで、弥よ念仏を唱へけり。(後略)

(キ) 『今昔物語集』一五一—五

(前略) 長増が云く、我れ、山にて廁に居たりし間に、心静に思えしかば、世の無常を觀じて、此く、世を棄て偏に後世を祈らむと思ひ廻しに、只、仏法の少からむ所に行て、身を棄て次第乞食をして命許をば助けて、偏に念仏を唱へてこそ極楽には往生せめ、と思ひ取てしかば、則ち廁より房にも寄らずして、平足駄を履き乍ら走り下て、日の内に山崎に行て、伊予の国に下だる便船を尋て此国に下て後、伊予・讃岐の両国に乞をして年来過しつる也。(後略)

(カ) は醍醐寺の僧觀幸がいわゆる二重出家をして土佐国に下り、そこで往生をとげたというものである。(キ) は延暦寺の僧長増が突然出奔し、のち弟子の清尋が伊予国で偶然彼を見出すという話である。資料として掲げたのは長増が清尋に出奔の理由を語った部分である。これによるとひたすら念仏を唱えて極楽往生をねがった長増は伊予国に向かい、讃岐・伊予国で門付け乞食をして暮らしていたのである。

このように平安時代末期の四国は往生をとげようとする人々が向かう場所だったのである。もちろん、他の場所で往生をとげたという話もないわけではないが、とりわけ多いのが四国である。

四国での極楽往生という想起されるのが『今昔物語集』一九一―一四の「讃岐国多度郡五位聞法即出語」である。これは讃岐国多度郡にいた極悪非道の源太夫が、偶然立ち寄った法会で講師から阿弥陀仏の本願を聞かされて突然発心出家し、首から金鼓を懸けて阿弥陀仏の名を呼びながら西に向かつて驀進し、西海のみえる山上で往生をとげたという話である。源太夫は四国の西岸部まで歩き続けたものと思われるが、「我れ尚此より西にも行て、海にも入なむと思ひしかども、此にて阿弥陀仏の答へ給へば、其れを呼び奉り居たるなり」とあるように当初は入水までするつもりだったようである。これは四国の海岸で西方極楽往生を願っての入水が行われていたことを示唆している。四国は西方極楽浄土への往生を願う人々の集まる場所であったが、さらにそこでは入水もなされていたのである。

以上のように、観音浄土にせよ阿弥陀浄土にせよ、往生を願う人々にとって四国は特別な意味を持っていた。四国は浄土への往生の場、渡海の地と認識されていたのである。熊野や四天王寺が持つ意味を四国は併せ持っていたともいえよう。これはやはり四国が都から見て西南の方角にあり、かつ四方が海に囲まれているという地理的条件が大きく関わっていたものと思われる。辺路修行自体は全国各地の海岸で行われたであろうが、四国の海岸は浄土への憧れを持つ人々にとっては特に魅力ある場所であった。四国にとりわけ辺路修行者が多かったのはこうした理由によるものと思われる。

### 三、辺路修行者の受容

最後に、辺路修行者を受け入れた地域の側の状況について考えてみることにする。まず辺路修行者たちが修行を行った霊験所―霊験寺院からみていこ

う。

さて、律令制下の仏教は国家仏教であり、鎮護国家をその主たる目的としていた。寺院や僧侶にはきびしい統制が加えられるかわりに保護が与えられていた。しかし、一〇世紀後期になるとこうした体制が崩壊し、寺院は自由な布教活動が可能となる一方で国家の保護がなくなって経済的自立をせまられ、地方豪族や一般民衆からの経済的支援が不可欠のものとなるのである。

こうしたなかで霊験寺院は自ら霊験所であることを盛んに強調するようになる。たとえば、土佐国室戸の金剛頂寺は「件寺は弘法大師祈下明星初行の地なり、(中略)国宰より庶民に至るまで当寺仏法の霊験を仰ががため、各山川田畑等を施入する所なり」(『平安遺文』一〇四七)、土佐国足摺の金剛福寺は「千手観音経供田について「観音慈悲の垂跡に奉遇す」(『同』三一八四)、讃岐国の曼荼羅寺は「件の山中は大師点入したまふ霊験の地なり」(『同』一〇〇八)、「霊験掲焉の勝地なり、これにより、代々の国司殊に帰依を致す」(『同』三二九〇)としている。これは国郡あるいは貴族・豪族の経済的保護を得るために自寺院が霊験所であることを主張する必要があったためである。

また、こうした寺院にとって修行者が多く集まることは好ましいことであった。なぜなら、遍路修行者は霊験地で修行を行っていたわけであるから、修行者が多く集まることは、そこが霊験地であることを証明するものとなるからである。霊験所の寺院にとって修行者は保護すべき存在だったのである。

次に、当時の仏教信仰は、「現世安穩」、「後生善処」という二世安樂的信仰形態が基本であった。平安時代後期の仏教といえば浄土信仰が強調されるが、実際には人々は仏教に浄土への往生とともに現世利益も大いに期待していた。そして地域在住の僧とともにこうした人々の要求に応えていたのが旅の修行僧である。『今昔物語集』には、明石津で遍歴の法師が疫病退散のための供養を行う(一四一―四四)、信濃国で盲目の流浪僧が村に招かれ法華經を読み病人をなおす(一三一―一八)、筑前国極楽寺で能登国からきた僧が念

仏講を行う（一五二四）などの話がみえる。このように各地を遍歴する修行僧も在地民衆の要求に応えていた。仏教が社会に深く浸透した結果、人々は仏教により現世利益を求め、浄土への往生を願うようになり、僧の活動に対する需要が以前より格段に高まったのである。もちろん修行僧はその見返りとして一定の報酬を得ていたようである。修行とはいえ日々の食料など最低限度の経費が修行者には必要だったが、それらの一部を修行者はこうした活動により確保していたのではないだろうか。

しかし、修行僧のすべてが歓迎されていたわけではない。『今昔物語集』二六一二に、「一人の修行の僧来たりて、貴く経を読み食物を乞う。僧の形、いと清げなりければ、『無下の乞食にはあらぬなめり』、と思ひて、女主人経を貰むで、上に呼び上げて物を供養するに、僧の云はく、『己は乞食には侍らず、仏の道を修行して所々に流浪するが、糧の絶えれば、来たりてかく申すなり』とある。つまり、女主人は修行僧が乞食僧でないことを確認して家に入れたわけであり、ここから乞食僧は人々によって排除されていたことが読みとれる。また、『同』一五一一五の「比叡山僧長増往生語」は、比叡山の高僧長増が突然出奔し、数十年後弟子の清尋が伊予守藤原知章に伴って伊予国に下向したところ、乞食僧として四国を巡っていた長増に再会する話だが、長増が清尋に会おうとしたところ乞食僧であるが故に追いつかれたものの、長増が高僧であることがわかると人々が深く帰依したとある。ここからも当時の在地の人々はすぐれた僧は歓迎するが、乞食僧は排除していたことが知られる。

このように、平安時代後期以降遍路修行が盛んになるのは、こうした霊験寺院の保護や地域の人々の支援があったことによるものなのである。

## おわりに

平安時代末期の四国における「海辺の廻」、すなわち辺路修行は、単に海辺難路を歩くだけでなく、各地の霊験所に詣で、そこで修行を行うというものであった。当時こうした辺路修行が四国の海岸で盛んであったのは、四国が極楽往生の地であり、補陀落浄土への渡海地と考えられていたためである。一方、地域の側では、国郡あるいは貴族・豪族の経済的保護を得るため霊験寺院は修行者たちを保護し、人々は現世利益や浄土への往生を求めて修行者を支援していた。

本報告で述べたことをまとめると以上の通りである。関係史料が少ないため推測にわたる部分が多くなったが、四国遍路の歴史の解明に少しでも役立てば幸いである。